



SONY
～ 寮歌 インストラル
メンタル ～

Our Songs ～寮歌 Instrumental 集～

- 1 都ぞ弥生 *The Memory of home city in March* (0:49)
- 2 偉大なる北溟の自然 *Grate Nature of the North Seas* (4:01)
- 3 凋落正に秋深し *Withering in Late Autumn* (4:15)
- 4 憧憬の故郷 *Where is your home town?* (1:45)
- 5 恵迪節 *Keiteki-bushi* (1:58)
- 6 沈黙の杜に *At Silent Woodward* (2:24)
- 7 楡は枯れず *Elms will Never Dead* (6:14)
- 8 昭和 50 年代メドレー *A Medley of S50's Dormitory Songs* (4:29)
- 9 朔北に *In North Land* (4:58)
- 10 寮友よ永遠に謳歌わん *Sing Together Eternally, My Friends* (5:39)
- 11 星の舟歌(Vonus Track) *The Barcarole of Stars* (3:52)

朝、コーヒーを飲みながら…

一人でピラを書きながら…

そんな寮歌の楽しみ方があっても良いと思う。

全 11 曲、新しく生まれ変わった寮歌をお聞き下さい。

2010 年 6 月 堤悠里子

Staff

Editing Producer=森恭一

Recording Engineer=森恭一(1-3,7,8,10)・珍部涼太(4-6,9,11)

Musicians:

Violin=松尾駿介(1,2,8,10)・道又奏絵(1,2,8,10)

Viola=松下隆(1,2,8,10) Violoncello=米田鈴枝(1,2,8,10)

Flute=成田郁美(2,10) Clarinet=住友瑠里子(2,10)

Trumpet=松木由祐(2,10) Trombone=小川敦史(2,10)

Piano=山口駿(2,7)・杉田香織(3)・永田理沙(10)

Percussion=山根喬子(2,10)

Guitar=珍部涼太(4,5,6,9,11)

Blues Harp=南賢士郎(9) Vocal=森田哲(11)

Cover Design=高橋阿寿香

Linear Notes=上仲壮・黒澤利仁・高橋阿寿香・山口駿

Planning=堤悠里子

2010 年 2～6 月 製作

曲目解説

●都ぞ弥生 (明治 45 年)

横山芳介／詞 赤木頭次／曲

都ぞ弥生の雲紫に
花の香漂ふ宴遊の筵
尽させぬ春に濃き紅や
その春暮れては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに
燃えなん我胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の 清き国ぞとあこがれぬ
恵迪寮歌の中で最も有名な曲である。その詞の非凡さ、荘厳さが他の寮歌と比べても際だっており、かつてはこの歌に憧れて北大を目指す者も多かったという。現在でも部活動を初めとした寮外団体で多く歌われる。上記の歌詞は一番のみで、北の地にくる前の宴の様子を描いている。その後五番まで北海道の四季を歌い上げる。現在は荘厳さに重きを置いて引き延ばした歌われ方をすることが多いが、このCDではメロディーの快活さを重視した。(山口駿)

●偉大なる北溟の自然

(昭和 39 年)

司馬威彦／詞・曲

序. 偉大なる北溟の自然は
我が眼前に限りなく広がりて
野に満てる清冽の気は
雄々しくも気高き情懐もて
峻路遙かに辿り来し
遊子が胸を今や満しぬ
一. 飄々の北風は荒び
白銀の華大地覆えど
そははろかなる古より
汚れなき美の世界なれば
若人はひたぶるの愁いを
秘めて 異邦ゆ憧懐れ集いぬ
結. されど視よ我等が周囲を
邪悪なる権力は四方に荒び
我等が愛し誇らん自治の砦に
暴逆の誠は課されんとす
されば我が寮友よ腕むすびて
今ぞ正義の旗を高くかかげん

何ととっても雄大な歌詞に心踊らされる寮歌であり、歌詞と曲の二つがこれほどにも噛み合った寮歌は他に類を見ないだろう。

北海道の大自然について謳っているのは言うまでもなく、雄大な北海道の自然が己を圧倒し覆いつくすが如く我前に限りなく広がっているのが目に浮かぶ。自然は人の力で制圧するのではなく、あるがままにそして、いつまでも憧れであり続ける存在である。ああ、とにかくカッコ良すぎる寮歌であることは確かである。筆者は知床のウトロに足を運ぶ機会があった。そこで見た景色はただただ美しく、涙が出そうであった。雪残る山脈、厳しい冬風にも負けず雄々しく伸びる樹木、力強く生きるエゾシカ。この『偉大なる北溟の自然』というにピッタリな場所であった。謳うたびに思い出される光景には、ひれ伏すばかりである。

結の歌詞には心高ぶる最後の歌詞『今ぞ正義の旗を高くかかげん』がある。そこには曲調からも強い押しがかけられ高揚するフレーズとなっている。(上仲壮)

●凋落正に秋深し (昭和38年)

諏訪正明/詞 宮田陸彦/曲

- 一. 楡が木の葉の秋風に
吹かれて落つる芝草に
佇む男子の胸の中
散りしく落ち葉の数知れず
凋落正に秋深し
- 二. 仄青白き月影の
银杏並木の夜歩きは
小さき鳥の乱れ飛び
路面覆える金色に
憂愁正に秋深し
- 三. 寮が窓越し蔦の葉も
黄色く紅く色づきて
梢を揺する秋風に
鳴るは心のため息か
寂寥正に秋深し
- 四. ゆえだもあらぬこの悩み
心の底に滲み入りて
ぬぐいも切れずただ涙
流れ落ちては地に吸われ
懊悩正に秋深し

この寮歌の作歌者である諏訪君は、「四季の歌ばかりではな

く、たまには秋だけをしみじみと歌う歌があってもいいではないか」という思いから、20歳になったばかりの感傷の中でこの曲を作ったそうだ。一番から四番までの歌詞を見ていくと、凋落(花がしぼみ落ちること、落ちぶれること)、憂愁(憂鬱と哀愁。心配や悲しみで心が沈むこと)、寂寥(もの寂しいさま)、懊悩(悩みもだえること)と純粹多感な時期の哀愁を表す語句が並んでいる。またこの歌詞は银杏並木や蔦の葉など、普段我々がよく目にする風景が描かれている。全体的に暗いイメージの寮歌であるが、この寮歌が作られてから半世紀近く経った今の寮生にも通じる思いが感じられ、感慨深い一曲である。

(高橋阿寿香)

●憧憬の故郷 (昭和50年)

佐藤守/詞 関川哲夫/曲

- 一. 「汝が故郷は何処にありや」
熱き血潮に身は溢れども
希望を胸に行方も知れず
朔風に身を寄せ漂泊い出でん
- 二. 聳ゆるポプラは何をか象徴し
遙かな大地は何語るらん
渺茫の地に理想を秘めて
真摯の道を歩みゆかん
- 三. 逍遙の詩静寂に透り
曠野を一人ゆく吾佇めば
日輪幽寂に手稲の端にて
朱に染まらん哉 原始の森は
- 四. 嗚呼寮友よ夕の瞑想
己身に嘆けども憂愁はやまず
白銀の季節寮舎に在りて
熱き心を語り明かせよ
- 五. 光幽けき憧憬の故郷
霞静かに流れ渡りて
新緑にみる自然の黙示
北溟の大地は我が故郷か

憧憬の故郷はご存じの通りギターコードがついた寮歌だ。これま

でそのような寮歌はなく、この寮歌が初めてポップ調となっている。それは作詞者が寮歌とは、その時代の寮や時代背景も表しており、その時代背景により寮歌も変わっていくのがこの寮の伝統ではないかと考えていたからではないだろうか。当時この寮歌は賛否両論あっただろうが、今の寮ではそのすばらしい歌詞と一風変わった曲により人気がある。寮歌は青春の表現方法であると作詞者は言う。それらの意思を受け継いでか今回このCDではものすごいポップな曲と変貌してしまった!!!平成22年版憧憬の故郷、これを聞けばノリノリだ!!!北溟の大地は南国の大地にかわるぞ!!(黒澤利仁)

●恵迪節（昭和53年）

甲斐陽輔／詞・曲

- 一. エイホッホッホ
 エイホッホ エイホッホ
 けむりを噴き出す
 有珠の山 有珠の山
 地をやぶる土の力こぶ
 エイホッホ エイホッホ
 大地の主の大あばれ大あばれ
 命がおしけりゃ
 地べたにひれ伏せおろかもの
- 二. エイホッホ エイホッホ
 塩を噴き出す
 大くじら 大くじら
 太平洋にはねる 神の魚
 エイホッホ エイホッホ
 海の主の大あばれ大あばれ
 俺がこわけりゃ
 海にぬかづけ おろかもの
- 三. エイホッホ エイホッホ
 大地に根をはる恵迪寮恵迪寮
 深雪をとかす友の血潮
 エイホッホ エイホッホ
 二百五十の青春のくると咲き

若さがつらけりゃ
 銀河にさけば おろかもの
 エイホッホ エイホッホ

エイホッホエイホッホ、この耳に残るフレーズで、勢いとノリの良さはこれに勝るものなし、といっても過言ではない。寮歌の中でこんなにも同じフレーズを繰り返すのも珍しく、新歓期のノリと勢いのある新入寮生はこの寮歌をよくかける。恵迪節は（現れるまで）かなり異色である。曲だけでなく歌詞でもある。有珠の山、etc。

しかしこの寮歌が作られた年は昭和53年、閉寮まであと4年となっている。「銀河に叫べ おろかもの」とは、これからの行く末の寮をおもい、どうにもならない焦燥感を何かで紛らわそうとする心が伺える。多くのものが変わる恵迪寮だが、その地に根力を伝えていてほしかったのだろう。

（上仲壮）

●沈黙の社に（昭和60年）

角田勤／詞 佐々木徹也／曲

- 一. 沈黙の社に春來告げる
 芳香馨し辛夷の花よ
 純白き残雪未だ消えやらず
 永き寒冬偲ばるる哉
 郷愁胸に充滿つるとも
 されど恵迪此処に在り
- 二. 水恋鳥の哀しき聲に
 我故知らず涙流しぬ
 短き夏と認識りはすれども
 樹樹色づきてはや盛夏逝きぬ
 哀愁胸に充滿つるとも
 されど憧憬恵迪に在り
- 三. 紅雲流るる黄昏どきに
 夕細道は幽か続きて
 何望むなく彷徨ひゆける
 この現身を悲哀しみにけり
 愁心胸に充滿つるとも
 されど青春恵迪に在り
- 四. 雪舞ひ踊る白銀の世よ
 天指す枝柯に樹氷咲く
 数多群なす星座の中に
 我に向かいて天狼星光る

寂寥胸に充滿つるとも
 されど経営恵迪に在り

- 五. 弛むことなく唯時は逝き
 生きとし生けるものは
 去りゆく
 其は人の世の眞理なれども
 限れる生を燃やし尽くさん
 追憶胸に充滿つるとも
 されど恵迪永遠に在れ

「沈黙の社に」の作詞者は北海道の自然を大事にしている。それは寮歌集の歌詞を見ただけでわかるだろうが、歌うだけでまるで北の自然の中にいるかのような気分になってしまうのではないか。寮歌をさまざまな楽器でアレンジしているこのCDだが、この曲はアコースティックギター一本で演奏している。その曲調は作詞者が大事にしていた自然を表すかのようなアレンジでありシャレオツなカフェでかかっているもなんの違和感もない。（黒澤利仁）

●楡は枯れず (昭和 55 年)

新井桂二／詞 奥田和人／曲

一. 朝靄けむる今ひとときの

熟寝の夢の幸せよ

覚めて現に見渡せば

美は崩れゆく北都 なり

天空常に雲抱けども

楡は萌えて大地をまねく

二. 清冽の野に道を耕し

荒野に明日を信じつつ

彷徨い行ける寂しさに

陽は傾きて我を見る

虚いゆける時にこそ

楡は映えて風を斬る

三. 北の自然は蝕ばまれゆき

青葉の降るや青春の寮庭

忘るるなかれ大願を

胸に秘めし涙痕を

時は人とは変われども

楡は枯れず空をさす

前口上に始まり、テンポの良い
旋律が謳われるこの寮歌は閉寮間
近に控えて作られたものである。
前口上はその閉寮のことを伝えて

いる。「ああ、願わくば再び糸を紡
ぎて…」と、100年の歴史、文化
を培ってきたこの寮が新寮の閉寮
によって切れてしまうことを懼
れ、未来の寮生へ今ある寮の想い
を後世に伝えていってほしい、と
いう気持ちが込められている。

この寮歌の歌詞の中には楡とい
う言葉が多用されている。おそら
く楡という言葉は恵迪寮のそのも
の、建物、文化、伝統全てを含め
ているのではないだろうか。特に
三番はそのことが顕著に表れてい
ると思う。「時は人とは変われども
／楡は枯れず空をさす」とは歌詞
の通り、恵迪寮の構成員や年が移
ろうとも熱い恵迪寮の想いは変わ
らないだろう、との願である。な
んて心に素直に響く言葉なのだろ
うか。我々が伝えていかなければ
ならない言葉がここにあるだろ
う。(上仲壮)

●昭和 50 年代メドレー

フォークソングを基調とした
「憧憬の故郷(S50)」以降の寮歌
は、それ以前のものとは比べてメロ
ディーがポップになり、親しみや
すい曲調のものが増える(このCD
に収められている曲も、多くがこ
の時期の歌を元にしてている)。弦楽
四重奏によるこの「昭和 50 年代メ
ドレー」は、そのような寮歌の転
換期に作られた 5 つの歌からなっ
ている。

曲は「雪の白さに」に始まる。

雪の白さに映える我らが恵迪寮

吹雪逆巻く日もあれど

正義の迫を見定めて

真実求むは風の教えなり

自治意識の鼓舞がテーマの歌
で、少なからず含まれる煽情的な
雰囲気は、率直に言えば好みに分
かれるところだろう。しかしその
勇壮な曲調(戦隊モノの曲を剽窃
したという噂も)は、この歌の大
きな魅力でもある。

続いてテンポが緩徐になり「汝
と我の(S56)」の前半が流れる。

よすがなき姿も見せぬ郭公を
探せしは誰ぞ 汝と我の瞳なり
草いきれ燃えたつ野にて戯れぬ
獣らは誰ぞ 汝と我の姿なり
原始林と古屋を覆いたる
邪なものめぐる世に
正義の想い 何処にか
汝と我の胸にあり

「雪の白さに」と同様、勇壮な
雰囲気感を湛えた歌である。メロデ
ィーのみを聞くと「汝と我の～な
り」と歌われる箇所突然リズム
が変化するように聞こえるため
か、この部分のテンポを異様に速
くして歌うのが最近の流行である
ようだが、個人的な感想を言えば
そのような歌い方に違和感を覚え
る。このCDも編曲の都合上それに
近い演奏をしているが、本来は曲
頭から動きのある伴奏を頭に描い
た上で、イン・テンポで歌うこと
を想定していただろうし、その方
が良い曲になるように思われる。

ともあれ、テンポを再び速めた
曲は「楡は枯れず(S55)」に移る(こ
の歌の解説は前項に譲る)。更に 2

台のバイオリンをバックにして、「うす紅の(S54)」が引き伸ばされた形でチェロによって歌われる。

うす紅の 空ゆうぐれに
滅びの風は 吹き荒ぶ
斜陽かげ射す 日に移ろいて
傾く姿 痛ましく
我が胸に満つ 過にし日の映え
懐いは 恵迪と共に
先代(2代目)の恵迪寮がすでに
廃寮濃厚となっていた時期の歌
で、牧歌的な曲と裏腹に一番は諦
観的な詞である。しかしそれは寮
に愛着があるからこそその感情で
あることは、「懐いは 恵迪と共に」
のくだりや二番以降の詞によく現
れている。CDは前半のみの引用し
かできなかつたのが惜しいが、原
曲は素朴な曲調と流麗な構成を持
った佳品だ。

曲は再び勢いを失い、「いつの日
にか(S51)」の旋律を歌い出す。

夜は巡り 限りなき
光の束は樹林をつらぬきぬ
朝の静寂の中一人にて

無為の思いもち嘆き憂える
もう情熱もなく涙ながる
一体作詞者には何があったのだ
ろうか。四番の歌詞に現れるよう
に、単なる失恋だったのだろうか。
いずれにせよ、高度成長期以降の
寮歌の中では群を抜いた悲壮感を
漂わせる歌である(終戦前後のそ
れとは、ちょっと比べようがない
が)。うっかり嵌ると抜け出せなく
なるような中毒性を持つ「後ろ向
き」の歌だが、やはりそのメロデ
ィーは心を打つ美しさを持っている。

CDの曲はこの後長い経過部をへ
て、再び「雪の白さに」を演奏し、
バイオリンの пассаージュが終結を
呼ぶ。

(山口駿)

●朔北に(昭和46年)

伊藤正朗/詞・曲

- 一. 朔北に手稲風の咆哮絶えて
静寂に痛し遠汽笛
凍てつく雪原に寒月の
蒼き光の射しそえば
聳天樹の影は猛くして
虚空指す彼方宿り舎の
灯は今宵また旅人の
継ぎ培いし迪を諭せり
- 二. 朝焼けて南に風の起つ聞かば
北の都に春近く
雪融け水の溢れては
豊水の岸塵高し
黄ばむ空ゆく鳥もなく
土の香ぞする野幌路を
独りそぞろに辿る日は
異郷の旅を思い侘ぶかな
- 三. はろばろと続く沃野の珠葱島
金に輝く北指して
延びる鉄路の傍に
かの石狩の文学碑
濁れる川に臨みては
沈む夏陽に涙する

回顧百年忘れずや

この地拓きし先人の夢

この寮歌は札幌周辺の風景が描かれており、一番は冬終日の如く吹きつける北西の風について、二番は春馬糞風に煽られて舞う砂塵について、三番は平原に沈む夏の太陽について書かれている。

三番の歌詞について作歌作曲者である伊藤君は「太古変わらぬ川の流れと余りに激しく変貌してゆく人間の営み、百年昔初めてこの地に鉄を入れた先人の労苦は、わずかに名作によって偲ぶだけであるが、赤々と沈んで行く夏の陽には何か手を合わせたいような荘厳なものがあつた」と語っている。この寮歌を歌う際、大半の寮生が三番の「涙する」のところで歌う声に力が入るが、これは伊藤君の想いが反映された結果なのかもしれない。

(高橋阿寿香)

●寮友よ永遠に謳歌わん
(昭和 57 年閉寮記念)

植木貴昭／詩 串田厚司／曲

- 一. 早緑の道駆けし我
小川に映る延齢の花
今この時の憧憬に
はるか千嶂仰ぎ見ん
心の静庵ここにあり
我が夢馳せし夕暮れに
明日の旅路を想いなん
- 二. 北陵の夏歩む我
今咲きそろろうす影のリラ
熱き涙のほとばしり
正義の道を貫かん
我らが誇る自治の魂
清雅にはゆる星よりも
深遠にして無限なれ
- 三. 吹雪の中に立てし我
原始の森に先人のかけ
盃かわす寮友と
過ごせし日々の感激よ
我等が道のしるべなり
我が春遠き北都にも
誓いの絆永遠に

先代の恵迪寮が廃寮になる際に

作られた歌で、曲の印象は鮮烈だ。特に「今この時の」で始まる 12 小節が見せる盛り上がりは、他の追隨を許さない。ともすれば安直な悲哀になりかねない「閉寮」というテーマにあって、この曲は見事に、心の静庵たる寮が存在したことの喜びを描き出している。それは当然、建物が変わってもこの歓喜の場を残したいとの希望—あるいは悲願—に直結するだろう。

今回の編曲は、このことを念頭に置いたつもりだ。当時の寮生は勿論、30 年近く経った今日を笑いある恵迪寮で生活できる現寮生にとっても、この歌は決して単なる別れの悲しみの歌ではなく、歓喜と希望の歌ではないか。時代が変わっても自治が続いて欲しいという切なる願いの歌なのではないだろうか。正直 CD でその事が伝えられたとは到底思えないが、途中に挟まれる「北に恵めし(S58 新寮記念)」と共に、是非原曲を歌ってみて、少しでも当時の寮生の思いを感じて欲しい。(山口駿)

●星の舟歌 (平成 20 年)

黒瀬智子／詞・曲

- 一. 雪どけ五月晴れ短い夏の日々
黄金のいちょう並木くぐれば
木枯らし
あしたも同じ夕日が沈むだろう
青春は退屈だと誰か歌う
- 二. まどろむ子守唄人生の哲学
雲にかくれて消える木もれびの夢
眠りをさまようまぶた開けば
まこと学成りがたし 月が笑う
- 三. 悠々暮らすこの若さを持って余し
港にたどりつくさだめなき小舟
目じるし一つの星追いかければ
流星雨のごとく目をくらます
- 四. あまたの先人が説く壮大真理
この脳はそ知らねども
目の前には
瞳の眺うつくしき人
千の論説より多くを語る
- 五. つつましい志が正しき答えか
道草のかたわらに咲く花もある
学べよ 遊べよ 恋せよ 舟は
風が導くままに青き帆を張る

人の生き方とは様々である。学業に励んだりする人もいれば一生をささげる人を探し求めている人もいるだろう。この寮歌にはそんな人生の道標となるようなメッセージが詰まっている。

『つましい志が正しき答えか道草のかたわらに咲く花もある』というフレーズがある。筆者は自分を哲学やら文学には程遠い人物だと思っているが、人生において道草をしたって構わないじゃないかと捉えている。多くの経験を経て、その中で思うことを見つけた人が一番いいんだと、この寮歌から考えさせてもらっている。

(上仲壮)

By Ryo-ka CD Project